

太平洋戦争と北米伝道 ③ 教会長たちの抑留所生活

おやさと研究所研究員
尾上 貴行 Takayuki Onoue

「危険な」敵性外国人として逮捕、抑留された教会長や布教師たちは、他の日本人と同様にいくつかの抑留所を転々としたが、特に男性はニューメキシコ州のローズバークとサンタフェ、また女性はシーゴビルに抑留されるものが多かった。そして最終的にクリスタルシティに抑留所で家族と合流した布教師たちも複数いた。今回はこのローズバーク、サンタフェ、クリスタルシティの各抑留所での彼らの様子を見ていく。

ローズバーク抑留所

ローズバークはメキシコとの国境に近いニューメキシコ州の砂漠地帯に位置し、陸軍が管轄する抑留所であった。この抑留所では軍隊的に3つの大隊区域に分けられ、各大隊は4つの中隊から構成された。抑留者の行政機関は自治制度が敷かれ、大隊ごとに知事、副知事、書記長、厚生部長、作業部長、郵便局長、会計部長、売店部長、また中隊ごとに市長、副市長、書記長などがおかれた。

この抑留所には様々な日系教団の宗教家が約100名いたとされる。仏教は各大隊で仏教連盟や仏教開教師会などを組織し、各種の教義会、日曜礼拝などを行った。キリスト教は各派合同教会を組織し、日曜礼拝や聖書勉強会を開催した。神道は大神宮、金光教などの教師が、神道連合会を組織した。天理教関係者はハワイ2名とアメリカ本土18名の計20名が収容されており、当初神道連合会に加わっていたが後に分離して天理教だけで独自に活動した。橋本正治アメリカ伝道庁2代庁長を中心として、毎週土曜日を説教礼拝の日、毎月26日を遥拝式と定めるなど、定期的な集会を開いていた。その様子は抑留所内で発行された新聞『ローズバーク時報』1943年新年特別号に、「天理教々団」として「橋本正治北米・カナダ・布哇の各教区監督を中心とす米布間の天理教々師二十名は毎週日曜日第十中隊社交室で集会を催し礼拝並に教義の研究を進めてゐる。此の外に面白いのは橋本教師が速読講談を催し大衆の慰安に努め感謝されて居るのは注目される。別に役員制を設けず各教師が順番交替で事務をとって居り集会も賑やかである。」と紹介されている。

サンタフェ抑留所

サンタフェ市はニューメキシコ州の州庁所在地であり、抑留所は近郊の山の中腹に設けられた。三方を山に囲まれた「要害堅固の地」であり、リビングストーン、ビスマルク、ミズーラなどの抑留所やハワイ、アラスカおよびペルーなど各地の抑留者が集められ、最終的には「いわば全米の在留同胞を網羅した一枚の縮図の観を呈する」場となった(越智、266頁)。また陸軍の管轄下にあったローズバーク抑留所と異なり、このサンタフェ抑留所は司法省移民帰化局の管轄下となり、大隊や中隊という呼称もなく、抑留者の自治制がより強い生活が営まれた。

アメリカ本土とハワイで逮捕された天理教関係者の多くがこの抑留所に収容された。そのうちの一人であった布野光蔵ワシントン教会2代会長の手記には教師23名、信徒12名の計35名の天理教関係者の名前が記録されている。橋本正治は自叙伝『章魚』で「殆どこれといふ全管内教会長教師と抑留生活を共にしたことは、その信仰信念、人格、教養、性質等の一切を赤裸々に観察する天与の機会を得たものであり、今後のアメリカの道を指導する上についての、生きた学問をした訳であった。」(橋本a、174～175頁)と述べている。またハワイの上野作次郎ホノルル教会長は、橋本と多くの時間を共有し、天理教の将来について語り合うのを楽しみとしていたとして、生涯忘れ得ぬ

思い出となったと述懐している。またこの抑留所で3名の教会長が病死している。1943年5月亀井季彦サウザンシティ教会長(享年55歳)、12月尾立金左衛門ヒロ教会長(享年56歳)、そして1944年12月にはアメリカ伝道の先駆者とされた神澤常太郎サンフランシスコ教会長(享年72歳)が亡くなり、それぞれ天理教式で葬儀が営まれている。

この抑留所では『サンタフェ時報』という新聞が発行され、所内での様々な事柄が報じられている。宗教関係ではキリスト教、仏教、神道などの勉強会や講演会などの記事がかなり頻繁に掲載されているが、天理教の会合や集会などは報じられていない。このことに関して抑留者の一人であった吉田進アメリカ伝道庁3代庁長は「天理教においても布教師や信者は毎日曜日に勉強会を行っていたが、定期的な集まりであり殊更新聞には掲載しなかっただけのこと」と述べている(佐々木、13頁)。

クリスタルシティ抑留所

テキサス州のクリスタル市から南東の郊外に位置したこの抑留所は、もともと季節労働者用の宿舎としてつくられていたものを日本人及びドイツ人抑留者の家族抑留所として改築されたものであった。最初にローズバークの抑留者が転入所し、その後シーゴビル、サンタフェの人々、そして最終的にはペルーから入所する者もあり、日本人2,000人、ドイツ人1,000人、そしてイタリア人若干名が収容された(越智、317頁)。数年ぶりに家族との再会を果たした天理教布教師たちは、「サンタフェで半年を過ごし、家族持ちはクリスタルシティの家族キャンプで同居が許されることになった。二年ぶりに家族と一緒にいられることは何物にもかえがたい素晴らしいニュースだった。」(吉田、93頁)などと、その喜びを述懐している。

この抑留所でも自治会が組織され、日本国語学校や幼稚園も運営されていた。またローズバークやサンタフェ同様、各教団がそれぞれに礼拝、講演会、集会など様々な行事を行った。特に宗教教育に力をいれる動きがあらわれ、仏教、神道、キリスト教会などがそれぞれに日曜学校を運営し、月々また毎週の諸行事を通じて抑留者たちの教化事業を行っていた。天理教も収容された布教師、信者、家族の総勢が70名を超え、毎月第3日曜日と第4日曜日を祭典日と定め、定期的な行事を開催した。

この抑留所では家族生活が営まれ、それまでの抑留生活に比べると落ち着いた生活を送っていたが、郵便の取り扱い、食事、所内での収容者への処遇など問題も多かった。橋本正治は、既定の用紙を使用しなかったとしてハワイへ送った手紙が1カ月ほどたつてから突き返されたことや、所長が交代した後、前任者が抑留者の葬儀の際には所長以下施設で働く白人たちがみな参列したのに対し、新所長になってからは白人スタッフは誰一人として参列弔問しなかったことに触れ、「不親切、非紳士的な事言語に絶するものあり、…文明を誇る米国、Democracyを誇称する国の抑留者に対する待遇はおほよそかくの如し」と記している(橋本b、47～48頁)。

[参考文献]

- 越智道順編『南加州日本人史 後編』南加日系人商業会議所、1957年。
橋本正治a『章魚』第二巻、1955年。
橋本正治b『軟禁六年』下巻、1955年。
佐々木久育「アメリカ・カナダ伝道の足跡(25)」『海外布教伝道部報』第334号13頁、1992年。
吉田進「抑留生活とアメリカ伝道一出直しの日々」『G-TEN』第6号88～97頁、1986年。